

恵迪寮同窓生諸兄！

2016・1・18

船越 一幸

私は昭和 28 年入寮で、今年は年男、10 月には 84 歳になります。法学部ですが授業にはほとんど出ていません。顔を知らない教授が沢山いました。永井陽之助ゼミでヒトラーと現代大衆社会の手ほどきを受け、ゼミに集中。学生の希望でゼミを週二回にし、研究室を飛び出し喫茶店に場を移して議論に熱中しました。

ゼミ以外の学びの場は恵迪寮です。理系・文系と多様な強者と接し、その体験が私の複眼思考の原点になりました。後で触れる私の「人生三回」を実現させたわけで、恵迪寮が私を育ててくれたことを感謝しています。

恵迪寮が取り壊されることになった時、同期の井口光雄くんから声がかかりました。同窓会を作ろう、閉寮の前に寮の食堂に OB が集まって寮歌を歌おう…。そこで彼の事務所に毎日のように詰め、寮生名簿、各学部同窓会名簿を基に、同窓会設立の案内状を、二人で出しました。会費振込の手続きに小樽郵便局に出かけた日は熱かった。

初代会長は昭和 2 年入寮の星光一北大名誉教授（精密工学）、代表幹事に昭和 25 年入寮の佐山峻先輩（法学部から HBC）にお願いしました。取り壊される直前の寮の食堂で「都ぞ弥生」を歌った時、感極まって涙にむせんだことは一生忘れられません。

当時の横道知事に、恵迪寮を開拓の村に残すよう直談判に行きました。佐山代表幹事を筆頭に十数名だったと記憶しています。では何を残すのか。人気のない寮に二十人くらい OB が集まり、ベッドの畳を裏返して年代を確認するなど、嬉々として作業した OB の姿は寮生時代に戻っていました。

第一回の寮歌祭はホテルの地下大ホール、あの階段席をどのように使うのか、そこは演出家としての私の出番でした。その後、帯広転勤となり、十勝エルム会の仲間と愉快的時間を過ごしました。

とにかく人生を三回送った気がします。

最初は HBC で番組をつくり、『安倍公房全集』（新潮社）、「寺山修司ラジオ CD」（キングレコード）、『北海道・マスコミと人間』（札幌学院大学生協）など

にその痕跡が残りました。

定年直前に北海商科大学（元北海学園北見大学）に移って二度目の人生、講義とゼミの10年間です。66歳の時『地域情報と社会心理』（北樹出版）を東大教授らと分担執筆。68歳で『情報とプライバシーの権利』（北樹出版）を出し、慶応義塾大学に呼ばれて講義しました。

70代からは第三の人生。HBCの同僚に手ほどきを受け、ロマネスクの世界にのめり込みました。まず、芥川龍之介や太宰治のネタ本となった13世紀の『黄金伝説』を読み、77歳で『守護聖人の世界』（文芸社）を書き、82歳で『ロマネスクの社会を散歩する』（共同文化社）を公刊、昨年秋には札幌市立大学の院生に「ロマネスクの社会的背景」を特別講義しました。

振り返ってみれば、恵迪寮で多彩な峻英に強い刺激をうけたことが、その後の人生を歩ませたわけで、改めて恵迪寮と寮生に心から感謝申し上げます。盛大な歌始めの儀を！

了